

## 子どもの食事づくり参加に関わる要因の検討

## (2) 親子比較

名古屋女大家政 ○酒井映子 内島幸江 熊沢昭子

目的 子どもの食生活状況を明らかにするために、子どもと親の食事に対する意識や関心度の比較から食事づくり参加に関わる要因について検討をしたので報告する。

方法 調査対象は名古屋市内の小学校2校の11歳男子149名、女子132名の合計281名の児童およびその母親204名である。調査時期は平成5年6月中旬とした。児童対象調査は質問紙による面接聞き取り法、母親対象調査は留置調査法を用いた。調査項目は食事の手伝いの状況、料理作りの状況、調理道具の使用状況などである。

結果 ①食事の手伝いの親子比較では手伝いの頻度、手伝いの自発性ともに親の期待度に対して子どもの意欲は低かった。また、親は食事の手伝いを男子よりも女子に期待する傾向がみられた。②料理作りへの関心について、料理教室への参加の有無からみると、料理教室参加者は少なく、親子の実態は一致していた。料理教室への参加を今後希望する者は女子では親子共に高かった。こども向き料理番組の視聴は、男子では親子に差がみられた。親は男子に対しては料理には興味がないという考えがあるものと推察される。③調理道具の使用状況では子どもは親よりも、使用していると答えた率が高かったので、調理道具使用に積極的であることがうかがわれる。また、コンロの使用に不安を感じている者は子どもよりも親に多く、その理由はやけどや火事に加えて消火忘れへの懸念が高かった。

以上のように、食事の手伝いは親の期待度が高く、料理作りへの参加や調理道具の使用は子どもの方が積極的であることが認められた。これらを踏まえて、子どもの食事づくりへの興味を助長した食事環境づくりをしていくことが大切であると考えられる。